

## 食洗機さん

**食**器洗い機を購入してから1年がたったある日、夫が突然、食器洗い機のことを「食洗機さん」と“さん”付けで呼び始めた。購入する前は、「食洗機って、本当に必要なの?」なんて言っていたのに、どうしたのだろうか。

“さん”を付ける心理について少し考えてみた。“さん”は、“さま(様)”が変化したことばだが、おそらく現代の日本で最もよく使われている敬称だ。「田中さん」「太郎さん」のように人の名前に付けると“さま”ほどはかしこまらず、“ちゃん”ほどは親しすぎない感じがして使いやすい。ちょっとくだけた会話では、「お医者さんに行ってきた」「あそこの会社の部長さんが……」など職業や役職に付けることもある。さらに、人間以外にも、「象さん」「お馬さん」「お豆さん」のように“さん”を付ける人もいる。『新明解国語辞典(第8版)』は、“さん”について、「『様』より親しみの気持を含めて、人の名前や人を表わす語などのあとにつけて(軽い)敬意を表わす。また、動植物や身近に存在する物などを擬人化して言う場合にも用いられる」と説明している。確かに、「ニンジンさん」「ゴボウさん」などと呼ぶと、絵本に登場するような姿が思い

浮かんで一気に親しみが増す気がする。いずれにしてもこの1年の間に、わが家の食洗機は、ただの家電製品から、身近にいて頼れる相棒「食洗機さん」に昇格したということなのだろう。

これだけいろいろな場面で使われている“さん”だが、逆に“さん”が付かないことに驚いたこともある。息子が通う小学校で先生が「お子たちの学校生活は～」と話し出したときのことだ。「お子さんたち」とは言うが、「お子たち」なんて言うのかしらと思ひ、辞書で調べてみたところ、京都のことばの1つとして「おこたち(お子達)」が載っていた。「他人の子供を尊敬して言う。単数でも複数でも同形」(『現代日本語方言大辞典』)ということだ。なるほど、確か先生は、京都の出身だ。私にとって“さん”は、付いていても付いていなくても気になる存在のようだ。

そういえば、今より人間関係に敏感だった中学時代、仲良くなりかけたクラスメイトの「さん」付けをいつやめるか真剣に悩んだこともあった。いつものようにフル稼働する「食洗機さん」を眺めつつ、自分にもそんな時代もあったなと少しだけ懐かしく思うきょうこのごろだ。

中島沙織(なかじま さおり)